

東日本大震災に係る学術調査検討委員会（第7回）

議事要旨

日 時：平成 29 年 3 月 29 日（水）14:00～17:00

場 所：日本学術会議 5-A（1）会議室

出席者：岩澤委員長、福田副委員長、目黒幹事、山川幹事、岡田委員、佐藤（岩）委員、
廣瀬委員、山下委員、渡部委員、大久保委員、矢川委員、和田委員

欠席者：向井委員、山本委員、佐藤（慶）委員、沼田委員

事務局：石井参事官、大庭参事官付、石尾参事官付、漆畑上席学術調査員

資 料：資料 1 前回議事要旨（案）

資料 2 提言のイメージ（案）

資料 3 東日本大震災に関する学術調査・研究活動アンケート
調査報告書（案）

資料 4 分野別メモとりまとめ版

参考 1 委員名簿

議 事：

1. 前回議事要旨（案）の確認

- ・資料 1 に基づき、前回議事要旨（案）が確認され、了承された。
- ・続いて、岩澤委員長より今回委員会の主な議事について、また、事務局より、資料の構成について説明が行われた。

2. 提言（又は報告書）のイメージ（案）

【提言のイメージ案】

- ・佐藤委員より、資料 2・3 に基づいて、提言（又は報告書）のイメージ案について説明が行われた。

〔意見交換〕

・自身の専門である建築学関連からいうと、濃尾地震や関東大震災の写真集が役に立つ。このアンケート結果ももちろん役に立つだろう。インターネットが今後 100 年後にどうなっているかはわからないが、そういう観点も前置きの部分に書いたらどうか。事実 100 年前のものが役に立つことはある。

→まず全体の構成だが、その成果の一覧をつけるかどうかは別として、このような形で委員会としてはよろしいだろうか。社会調査の報告書を作成する際の、標準的なやり方ではあるのだが。

→目次は非常にすっきりしており見やすい。前回を含めてこのやり方でよろしいだろうか。

→委員全員異論なし。

3. 調査報告書（付属文書）の原案について

【参考資料（付属資料）の取扱いについて】

・それでは、参考資料についてご意見いただきたい。

→もうひとつ、これはむしろ事務局の方に尋ねたいのだが、本文は分量とフォーマットが決まっているが、付属資料について様式的に何か注意すべき点はあるのか。

→「調査報告書」というものが、日学でいうところの何になるのかということだが、「付属資料」であるとするのと特に何も無い。しかし、タイトルに「学術会議委員会」というクレジットが入っているので、このままだと「意思の表出」の中の「報告」に該当するのではという指摘があった場合、やはり「20 頁」の制約がかかってくる。あくまでこの検討会の中でまとめられた資料に過ぎないとすれば、その問題は全くなくなるが、「編集発行 日本学術会議 東日本大震災に係る学術調査検討委員会」の報告であるとする、幹事会の了承が必要となり、むしろ別建てで了承をしていただいてその上で提言を出すというスタイルとなる。報告と提言とは別建てです、だとすると制約がかかってくる。そのあたりがこの段階では何ともいえないのだが、事前に「科学と社会委員会」が「20 頁」について決めた時とあと幹事会、これはむしろ福田先生の方でご相談いただいた方がよいかもしれないが。

→私は付属資料でいいと思う。報告書にすると、報告書として独立させなければならない。独立させると話が違ってきてしまいそうな気がする。

→それならば、付属資料から委員会のクレジットを外し、付属資料としてまとめられたものという扱いとし、全体として提言の中の一部であるということでした承をいただくという形となる。

→大型研究計画は基本的にそういう形になっていて、それまでの経緯のようなところが非常に分厚い資料となっていて、多分それと同じ扱いでいいのでは。

→自身もそのような気がしている。むしろ委員会がそれでよいというのであれば、後でそのモデルのようなものがあれば頂戴して、それに合わせるということにしたい。

→それで構わないか。

→構わない。提言の付属資料にする。

→その場合は、正式な資料として、提言とともに必ず作成するということか。

→提言のところで付属資料のリストが載った形になるので、それは提言（20 頁）の外であるが、提言として一冊にまとめた形で出す。大型研究計画も分厚い冊子にしているが、本文 20 頁で各提案者が出された計画が 4 頁ずつ程度出て、そのプロセスや選考過程が付属資料に全部入っている。

→そちらの方がいいだろう。別個となるとかえってまとめにくくなる。

→実態でいうと、表紙の部分がこのクレジットを使わずに、委員会段階でまとめたものと

して載せていただき、最後の頁の「編集発行：日本学術会議」のタイトルというよりも、委員会資料として載せていただければそのまま付属資料として載せられるのではないか。

→今のことを整理していただいて、メールで頂戴できればそれに合わせて作る。

→了解した。

・この2頁から表紙と一番最後以外は自由なのか。

→付属資料の一部を構成する資料としてまとめていただければ、多分何の制約もないはず。査読の際にも資料をお渡ししたとしても、付属資料についてコメントされることは、よほど全体と違うことが書かれていなければ問題ないだろう。

→前の提言と少々だぶっていても、内容は問題ないのか。

→その意味では、前書きがいるのかという問題はあがあるが。

→それは不要ということか。

→いらないと思う。

→付属資料としての目次がついていて、個々の内容でこの調査の中身について作られているということであれば。

→もしあるとすると、多分本文中で利用する必要があるれば利用するくらいなのは。

→それと、もし前書きがないとすると、調査の目的の部分をもう少し増やすかどうか。

→調査報告書という観点からすると、和田先生からご指摘があったような点のほかに、協力していただいた方への謝辞とするのが通常の取扱い。

→提言というの、別に提言だけ書いてあるわけではない。

→要するに名前をいちいち800人入れるわけにもいかないのだ。

→そういう意味では、謝辞を書いても何の問題もない。

→協力いただいた会員その他団体への謝辞を提言に入れても、特段問題はない。

→会員や団体によってはご協力有難うございますと。

→提言作成の協力者を想定されたと思うが、私の申し上げたのは、アンケートに協力いただいた方に対する謝辞を通常報告書に入れるということ。

→提言をまとめて謝辞を書けばいいということか。

→その通り。もちろん名前はなくそもそも匿名ということになるが。一文入れていただければ結構で、それも必要なければ前書きに。

→それはあり得ると思う。

→それでは、全体として付属文書に合わせた体裁に修正したいと思う。その意味で、1から4までは引続きワーキングでブラッシュアップしたいと思う。ワーキンググループの先生方にもご尽力いただいているが、特にとりまとめ段階では佐藤慶一先生にご尽力いただいている。そのメンバーで引続き完成させたい。現在の進捗状況は7割から8割程度で、最後まで完成したい。

【学術活動の成果一覧について】

・最後の論点だが、先ほどから申し上げている報告書の参考資料として、「東日本大震災に関する学術調査研究活動」の成果一覧を付けるかどうかという点についてご検討いただきたい、又は解決しなければならない論点を廣瀬先生に整理していただいているので紹介願った上で、この委員会としての方針を決めたい。

→佐藤先生から話をいただいた時に、それをリストにして報告書なり URL を載せるか否かということで、それがいくつ程度あるのかは存じあげなかった。それを何人程度で行うのかという問題があるのと、先ほど話にあったように「自由意見等は匿名性を持つ」と答えている以上、資料等を入れるので間接的にどなたがそれに関与したのかはわかる。この点はどのようにお考えになられるのか、うかがいたい。また、ひとつ提案だが、もしマンパワーがない場合、ご担当いただいた専門分野別にリストをまとめてエクセル表にして、それを寄せてワーキングでリスト化する方法があると思うが、それは可能か、時間的に間に合うかということについてご意見をうかがいたい。

→その事項を載せて問題ないかということだが。

→一応ご検討いただく必要があるのだが、このアンケートの建付けとしては、「非公開項目」と書いてある項目は公開しない、それ以外については「報告書に掲載する」という仕切りになっている。資料の 132 頁をご覧ください。その「問 1 回答者自身について以下お書きください。非公開項目…」とあるが、これは調査結果の整理に必要なが、報告書等に掲載する約束をしているので、こういったことを載せる必要がある。こういった項目が他にもいくつかあって、例えば次の 133 頁の「問 4」や「問 5」である。要するに個人やグループの特定に係るものは公開項目にしてある。これに対し、今問題になっている「問 16 (139 頁)」は非公開項目にはあらかじめ指定していなかった。それからここにあげている報告書等が必ずしも回答者と完全に一致するかはわからない。以上のようなことから、実務的に重要なマンパワーその他の点を除けば、匿名性との関係で掲載できないことはないのではとの判断はできる。それでよいか委員会としてご審議願いたい。

→それをやるときに、国会図書館から 1、2 名オブザーバーとして参加していた。その役割は、アーカイブ活動を国会図書館で行っているらしいが、あちらは受け身の立場で来たものを載せる。こちらとタイアップしてもらえば大変有難いと、向こうからもそういう点では協力できると、前任の課長から話があった。しかし、今回の委員会が始まる前後に向こうの担当者が変わった。それからこちらからは特に呼んでいない。その経緯からするとアーカイブ化は重要だと、それこそ残すべきだとの意見があった。可能であれば、是非残したい。

→それには全く異論はない。イメージとしては、こういうことだと思う。現在のエクセル資料には、700 人分回答があると。例えば報告書を出して、それに書誌情報が載っており、学術書を発表していれば学術書についてエクセルに載っていると。エクセルの表側に回答者が 1 から 700 まであって、表頭に成果発表のジャンル別に 1 から 8 まであって、それらの情報を一覧表にしていく。あらかじめ書式を指定しておらず、各回答者によってスタイ

ルはバラバラなので、その整理をする。700×8ということはないが、実際は記入されるものはその半分程度、300 から 350 の回答についての書誌情報を整理しつつ、報告書に載せられる形にしていくのが、今後の作業ということになる。廣瀬先生が懸念されるように、これをひとりであるいはワーキンググループだけで作業できるかということだが、ひとつはご提案があったように委員会でまとめて対応するのか、あるいはアルバイト等を頼むことができるのか、その辺を考慮の上ご判断いただきたい。

→アルバイトを雇うとどの程度の日数になるのか。例えば先生のところにアルバイトを派遣して何日程度を要するのか、その時の費用はどの程度なのか。

→どの程度までやるのかということで、多分書誌情報が正確でないということもあるはず。それをどこまでキチンと調べて、誰もがそこに行きつけるようにするまでやろうとすると、多少知っている人でないとできなかつたりする。分野が近ければまだ正確なところまでいくが、分野が違おうとどう行っているかわからなくなる。従って、より正確なことをやろうとすると、分野が近いところで整理した方がしやすいだろう。

→入力だけアルバイトに頼み、チェックを先生方にさせていただくというのはどうか。例えば抜けている事項とか、(専門家でないと)想像がつかなくなつたりするので。

→それは、気が付かないのではないかと思う。

→こちらが完全にそうするのではなく、出てきたそのままとを一覧にするというのはいかがか。それ以上の負担は我々としても無理だ。

→この 4 種類になっているが、その全てとお考えか。ウェブサイトまで全てやるということか。

→自分の分野だけやるのであれば、そんなに時間をかけずにできるのでは。

→それでできそうだろうか。指示をしてもらいながらであれば。

→できると思う。

→何ともいえないが、今のご提案で可能かと思う。実際廣瀬先生に全体のフォーマットを作成していただき、その後に今回自由回答一覧を分野別に先生方に届けたが、それと同じように各々のご担当のエクセルデータをフォーマットに合わせて整理していただいたものを戻していただく。

→そこまでは佐藤先生に負担をいただくかもしれない。

→やってみないとどのくらいになるのかはわからない。

→どういう順番で並ばなければいけないではなくて、リストに整理して...

→50 音順に並べるとか、分野別にまとめるとかを含めて少し設計をしていただくということだと思う。最終的に報告書にどうなるかを作ること。いずれのご相談にも応じるつもり。

→700 人のうち半分、それを 10 で割るとひとり 30 分から 40 分。大丈夫だと思う。

→自由回答の方に文献名が入っているものもある。

→それは入れないということでもいいのではないか。

→アンケートのコピペで対応する。

→分野別でやるとすると、複合領域が誰がやるのかという問題もある。複合領域はかなりある。

→全体として、完璧を期すことはできないので、ざっくりと回答していただいたものを最大限に利用する方針で行かざるを得ない。

→どこかにその旨を書いておいて、その下で対応する。

→サポートする者なしでということ。外部の方をサポートにつけるのは無理なのか。

→どういうことをすればよいのか。

→最終的に整理して、先生方から集まったものを一つにする時に並べるという作業。十数人の先生となると、大変な作業となるのだが。

→それは知識がなくても、普通のアルバイトでも大丈夫ならば、うちの研究室の者を派遣してもよいが。

→データのやり取りでも大丈夫だと思うが。

→必要な時だけ、前もっていただければ。

→廣瀬先生が「(皆に依頼する時の) デザイン」とおっしゃったが、そこがうまくできていれば、エクセルでソートすれば問題ないはず。廣瀬先生が我々に依頼する時が大事になる。

→あまり詳しくないので、デザインでいいものがあれば教えていただきたい。単行本ならイメージできるが、URL とかを題名としてどう載せたらいいのかといったことは整理したことがないのでわからない。ウェブのタイトルとアドレスなどだろうか。

→そうならば、あまり難しくしないで、分野ごとに形を指定してしまうと、そのまま張り付けるだけでほとんど済んでしまう。集めたものを並べるとどういうルールで並べるのかはわからないが、第一に選んだ項目だけをここに並べてあるという話をしておいて、各々の分野ごとに先生から送られたものを順においていけば、ほとんどまとめる作業はいらないのでは。

→エクセル表は、もともと分かれているのか。

→1 から 8 まで列になっている。

→個々の URL というのは、タイトルなどバラバラだから、それをまとめたいという意味か。

→報告書のようにあらかじめフォーマットが決まっているのではない。それを表出するかどうかということ。

→それは仕方ない。書いてなければ調べようがない。

→イメージとしては、資料の「問 16」。139 頁にあるように報告書であれば、著者名、刊行元、発表年を書いてほしいということで、我々としてはこの順番、項目を書いてほしい。

→そのようなイメージということか。

→エクセルの表の形でやっていくと、実際に印刷物にした時がイメージできないが、印刷物にする時、おそらく表か何かにして、項目ごとに入れる時に、ブランクでよくてただ貼るだけでよければ、各々にどの程度のスペースをとるかということ貼っていただければ、

安全なコピペでできる。そして空欄は構いません、といってその様式、改行してこの程度の幅で入りますというのは全部可能かと思うが、それはそうではないのか。

→種類がどうなっているかによって記載の仕方バラバラになる。

→であれば、その具体例で今の表に入れていただき、不都合がないかという確認を各々に最初にしていただき、不都合があれば、様式そのものを変えるのか、そこだけ書き方が特殊な書き方のルールを決めるとか、そうしていただいて、入らないものは後に相談ということにしては。

→私のイメージは、700 人か 300 人か答えた方の回答を表にしてもスパース (sparse) になってしまうので、報告書なら報告書を抜き出して、300 人の方の内容を載せて、今度提言は提言でと。エクセルのままをプリントしてもスカスカになってしまう。この 8 個に分けて縦に並べればいいのでは。そんなに難しくはない。

→報告書の中では著者名、刊行元、発行年か。著者名は必ずある。全部著者名なら著者名でソートすれば。

→和田先生がいわれたように、この 8 項目ごとに分野はその中に全部入れるのと、分野別の中で 1 から 8 をまとめるという 2 つのまとめ方がある。

→最初の方で物凄い量がある。報告書が 100 件とか。

→私のイメージは、報告書が報告書として並んでいてもいい。前と参照するのが結構難しいと思っていて、特にデータベースは訳が分からない。それが分野ごとに入っていると戻る時に戻りやすいのでは。データベースに例えばタイトルを付けなくても、ある分野のカテゴリに入っていれば、そこから何とかできるだろうと。という印象があって、そうするとあまり面倒なことはなく、各先生のところでまたものを載せるので済むのでは。

→それなら後でまとめやすい。

→私もそう思う。複合領域を含め 31 分野があるが、大項目はその 31 の分野、例えば「言語・文学」の中で報告、データベースというように直列に並んでいると、そういう構成だということ。

→ソートはどうなるのか。報告書の中の順番は。

→例えば、50 音順にするか、発行年順にするかということを先生方にお考えいただく。場合によっては回答順ということもある。実際の作業が煩雑にならないような方法をお考えいただきたい。

→特段きれいにしなくても、アンケートそのものでよいのではないか。

→ご了解いただきたいのは、回答は様々な形で入力されていて、それをきれいに整理したり空白部分を補充したりすることはしていないということ。それでも発表することは、データを無駄にするよりはるかに有益ということ。まず項目があり項目の中にジャンルを入れていくと。ジャンルの中のソート、その順番をどうするかは検討させていただいて、なるべく無理をしないように工夫すると。

→エクセルで電子媒体は載るのか。

→まず提言そのものであれば、PDF ファイルで出すのが基本。PDF ファイルの中の表の部分をエクセルで読めるようにするというのであれば、それは可能だが。(事務局)

→そうすれば、キーワードで検索できる。

→そういうことで先生方に作業をお願いするのであれば、それに先立って全体の構成を廣瀬先生にご検討いただく。

→やってみないとわからないので、やってみて不都合があればよろしくお願ひしたい。スケジュールのイメージは。

→そこは後で、一番最後にお話ししたい。日程のところが難しいので。

→報告書に関し本日ご審議いただきたいのは以上。

4. 分担委員からの分野別メモについて

【各委員からのメモの説明】

・次に岩澤委員長より、資料 4「分野別メモ一覧」について説明があった。メモの説明は、岩澤委員長（化学）、福田副委員長（基礎生物学・統合生物学）、目黒幹事（情報学、土木工学・建築学、和田委員と共同）、山川幹事（史学、地域研究、経済学、経営学）、岡田委員（言語・文学、哲学）、佐藤委員（法学、政治学）、廣瀬委員（心理学・教育学、社会学）、山下委員（臨床医学、健康・生活科学、歯学、薬学）、山本委員（基礎医学）、渡部委員（農学・食料科学）、大久保委員（地球惑星科学）、矢川委員（環境学、数理科学、物理学、総合工学）、和田委員（機械工学、電気電子工学、土木工学・建築学〔目黒幹事と共同〕、材料工学）の順で行われた。また、その間、2 回にわたり意見交換が行われた。

【意見交換①】

・岩澤委員長の説明の後、次のような意見交換があった。

〔意見交換〕

・この分野別メモ一覧は、後ろの Appendix に入れろといわれたのではなかったか。(矢川)
→これはそのまま入れることになっている。

→これをそのまま入れて、これを抽出して再利用するということか。今いわれたことは、資料 2 の 4 番「論点ごとの集計分析」の部分か。

→資料 3 の 101 頁から 127 頁の部分に（そのまま入れる）。提言の形でまとめて、回答を抜き出して少しまとめる。

→資料 2 の 20 頁のものを作成しなければならない。

→この資料 2 は既に過去の文書で、本日配布するのも実はミスリーディングということにご留意いただきたい。

→どういうイメージなのか。アブストラクトを作ったり、目次をつくったりとそれにはルールがある。その中の第 1 章から第 3 章と本文がある。そのイメージの中で、どういうように入れていくのか。資料 4 に例えば「連携が悪い」などの項目があるが、これをタテか

らヨコに並べるというのはどうか。

→（分野別メモの部分は、）今日初めて行うということもあり、ややわかりにくい面もあると思う。全体で最大限で 20 頁であり、先生方には一人当たり半頁から 2 頁でお願いしている。今回は提言の基になるどういう課題があるのかを示していただいたわけだが、中には提言のような形にまとめていただいているものもあるようだが、それは大変有難いこと。

【意見交換②】

・矢川委員の説明の後、次のような意見交換があった。

・「学術会議できちんと連携を図るべきだ」といった意見が多いが、あの中で何をどうやって対処するかはわからないのでは。まずは入ってみないと、どういうところで何が起きているかはわからない。そういう状況では、日学を通すと初動が遅くなってしまうような気がする。多分いくつかの段階に分けるのだろうか。どこかの段階で日学が音頭をとることだろうか。初動はいくつか無駄があっても仕方ないのだが、どこかでやらないといけない。

→そういう意味では、これまで日学からは何もなかった。

→（自身の所属する）水産学会でもそれに取り組んだが、水産学会だけではなかなか信頼が得られない。やはりお金がなく現地に行けない。例えば、現地を実際に見て組み立てることができない。そういうところは日学ができるのではないか。

→昨年 4 月 16 日に熊本地震があった。目黒先生のご提案だったのだが、東大地震研をはじめそれなりの方を分野ごとに集めて、10 名くらいで記者会見を合同でやった。18 日に行ったが、NHK や民放など計 40 社程度が集まった。その際「今度熊本地震の後に東海地震はあるのか」と質問されて、（専門家として知りませんとはいえないので）一応の回答をした。次に別の記者が「建築は大丈夫でしょうか」と地震専門の先生に質問し、彼は「大丈夫だろう」と答えていたが、その程度の対応だと、記事がめっちゃくちゃになってしまう。わからないことを答えるようなことだけはしない方がよい。米国の土木学会に倫理規定があるが、そこには自分の専門でないことをわかったふりをして答えてはいけないという規定が 20 項目程度書いてある。

5. 特徴・課題の分析についてとりまとめ方針について

・提言に対しどうやって分野別メモの内容を橋渡しするかについて、ご意見をうかがいたい。このメモ一覧は個々の先生方が修正をされると思うが、それをそのまま佐藤先生の文書に組み込むことになる。提言の形でこれを取り入れたいということだが、項目としてお願いしてあったのは...

→議事録のこと。資料 1 の 2 頁目下の「以下の点をメモにまとめる」の部分である。

→その部分が想定した提言の中の小項目になるので、先生方は各々の分野別メモを基に、まずひとつはご担当の分野のアンケート概要、二つ目はその分野の回答の特徴、三番目と

してその分野の調査活動の意義と成果、それらを1パラグラフ程度でお願いしたい。今の2頁目の議事録よりも少し突っ込んだ形になる。次に、アンケートから読み取れる学術活動をやったことの課題、最後にご自分の意見、提言。以上だが、多分ひとり1頁程度に収まるだろう。分野によっては、少々頁の多寡はあるだろうが。

・例えば、(複数分野を担当する)私の場合は4枚書くということなのか。分野によって性格は異なるので、統一的な書き方というのが難しい。

→一応分野の性格が異なっても一括りでとお願いしているが、分担してみて少し色が違うと思ったら、2つに分けるなど対応願いたい。

・先ほど議論があったデータを細かく読むかどうか、そこを統一していただきたい。

→客観的にやるとすれば、データしかないと思う。データの裏付けがないと書きにくくて書いたのだが。

→ばさりと書くよりは、せっかくアンケートが出ているので、そのベースとなるエビデンスを入れて書いていただくと、後でまとめる時によいだろう。

→確認だが、この報告書の中の分野別に入れるメモはこれに足しても構わない、私のように自由回答中心に書いている場合にも、アンケート結果を随時読み込むと、それはそのまま。今の岩澤先生がいわれたのは、提言を作るために1頁程度にエッセンスをまとめてほしいということだと思うが。この2つをやればいいということ。

→データベースは途中でもいただいた気がするのだが、何が最終のものかはわかるのか。

→報告書についていうと、昨日配信されたものが最終版。それは7割から8割の出来ということで、数値が大きく動くことはない。

・部門によって相当違いはあるが、提言とか報告書を見て感じるのは、具体的な図表を入れて出しているものもある。我々の文書にはその裏に膨大な参考資料があるので、図表を使ってこれがあるからこうなんだという時は、そこを引用する形で我々の文書は進んでいく。それとも本文に図表は入れた方がいいのだろうか。

→決定的に重要な図表があれば、入れていただくということだろう。

→20頁以内に収めるようにするので、場合により重要な図表があったら入れる。

→分野ごとにそのような図表はないと思う。私が申し上げたのは、各分野横断的にデータをひとつの図表に集約することはあるかもしれないということ。

→あとは引用すればいいということか。

→提言は20頁までなので、3頁でも4頁でも悪いわけではない。実際短い提言もないわけではない。必要かつ十分な文章が入っていればよいと思う。

・別の話だが、放射能汚染の経験がないので困られたということだった。こうした件の調査には建築・土木関係者はよく関与するのだが、このところの地震でも、色々な研究者が勝手に田畑に入ったりしたので、少しコントロールしてくれという要望があった。それは多くの学会にメールを送って、必要であれば交渉するからということになった。こうした調査交渉は例えば日学がやればといった話もあったが、土木学会にも建築学会にもそうし

た調査を行う時のガイドラインがあつて、同じ場所に全国の多くの研究者が一度に集まらないように、という規定がある。こうした調査は限なく調査する必要があるので、例えばどこの学校は誰がやるというように調査の分担をして行うという考え方だが、こうしたことをどこかに書いたらいいか。

→ぜひ入れたいと思う。今までそういう点はなかったのか。

→日学としてはやっていないのではないかな。

→倫理という項目があればよい。

→日本には全権責任をとるという考え方はない。米国とは違い、行政官は責任をとらない。先生も逃げてしまう。

→研究者が志望するということで、そこは責任ある者が守ってくれないと。今回も原子力技術者は相当いじめられているので（それを守らなければならない）。

→外から見るとわかるのは土木・建築分野で、すぐ何がしかの組織が立ち上がって、学会としてもその活動の方向はよく見える。日学がなぜわざわざやらなければならないかというところ、今回でいうと、心理とか社会科学といった分析と相まった形の日本の最もよいスタイル、組織を最大協力の中で作るためである。本来何もなかったところに、人が住むはずのないところに国を作ってしまったのは、文明国では日本だけ。本来文明が成り立つはずのないところに、世界に冠たる国が存続しているという不思議さ。しかも今後もっと豊かになろうという願望がある。（こういった国の将来のために、）やはりこのテーマでも社会科学の助けも借りて議論しなければならず、そういうことは日学という場で行い、まとめることができる。先ほどの 5 項目に対しても、社会科学の立場で見ていただき、修正などしていただければなというのが当初からの希望だ。ということで、アンケートをまとめ、提言の部分はご自分の意見も入れていただいてまとめていただくということだ。

・最後に次回委員会の日程調整が、委員と事務局との間で行われた。次回第 8 回委員会は 4 月 24 日で合意された。

（閉会）